

県産キュウリの産地形成と産地間競争

清野 栄司・八巻 康雄^{*}

(福島県農試)

まえがき

最近の大消費市場をめぐる産地間競争は激しく、特に園芸、畜産物のような需要増大の傾向にある作物の新旧産地の規模拡大競争は激しい。福島県のそ菜関係者は「産地は北上する」を合い言葉に、交通事情の有利性を生かした輸送園芸の生産に拍車をかけている。まさに「産地は北上する」のとおり、最近のそ菜産地は東京を中心に同心円的に発展し、各地に新興産地が生れている（東北農業研究第8号P.262参照）。しかし、このような産

地拡大の結果、市場競争が激しくなり、経済的な弱点をもつ産地は、品質競争にやぶれ去る危険性をも多分に持っている。そのためにも、市場競争の激しくなる前に市場競争を知り、産地の欠陥を知って対応策を明らかにすることが重要であると考え。本稿はこのような観点から県内の主要新興そ菜産地で、すでに東京市場で銘柄名「須賀川きゅうり」の産地として知られる須賀川市西袋地区を対象に、技術革新をどう受入れ、出荷体制を強化して市場対応し、市場に確固たる地位を築くに至ったかをみたものである。

第1表 市場入荷量割合の産地別、月別推移

(イ)

	総 数						1						2					
	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40
埼玉 茨城 栃木	30.0 9.0 2.0	32.0 10.0 3.0	27.0 15.0 5.0	21.0 13.5 8.5	20.0 15.5 9.5	19.0 12.0 9.5	1.5 — —	0 5 —	— — —	— — —	0 — —	— — —	0 1.0 —	0 5 —	0 — —	— — —	0 — —	— — —
福島	2.0	2.0	4.0	5.0	7.6	9.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
千葉 山梨 神奈川 東京 その他	11.0 — — 12.0 34.0	11.0 — — 8.0 34.0	9.5 — — 5.5 34.0	9.0 4.0 5.5 — 33.5	8.7 4.5 3.8 — 30.4	9.0 2.5 2.0 — 36.5	— — — 0 98.5	— — — 0 100	— — — — 100	— — — — 100	0 — — — 100	0 — — — 100	— — — 0 99.0	0 — — 0 100	— — — — 100	0 — — — 100	0 — — — 100	0 — — — 100

(ロ)

	3						4						5					
	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40
埼玉 茨城 栃木	0 1.0 0	0 0 —	0 — —	0 — —	1.0 0 0	1.5 0 —	3.0 0.5 0	3.0 1.0 0.5	4.0 1.0 0	4.5 0.7 0	8.4 1.2 0	9.0 1.5 0	12.0 5.5 1.5	15.0 5.0 1.0	14.0 5.0 1.0	15.0 5.0 1.0	21.0 5.8 2.0	16.0 4.7 1.0
福島	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0	0	—
千葉 山梨 神奈川 東京 その他	2.0 — — 0 97.0	0 — — 0 100	0 — — 0 100	0 — — — 100	0 — — — 99.0	1.0 — — — 97.5	3.0 — — 0 93.5	2.0 — — 0.5 93.0	4.0 — — 1.0 90.0	3.5 0.3 0 91.0	3.4 1.0 0 86.0	3.0 1.5 0 85.0	5.0 — — 3.0 73.0	6.0 — — 3.0 70.0	5.0 — — 2.0 73.0	6.0 3.0 0 64.0	5.0 3.2 0 57.0	4.0 3.0 0 70.0

* 福島県園芸特産課

(イ)

		6						7						8					
		35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40
埼玉	栃木	20.0	30.0	30.0	29.0	40.0	39.0	43.0	48.0	53.0	50.0	45.5	43.0	42.0	46.0	36.0	20.0	10.5	8.8
茨城	栃木	7.0	7.0	10.0	10.0	10.0	8.0	5.0	4.0	9.0	9.0	12.0	14.0	7.0	9.0	18.0	20.0	23.0	23.0
		1.0	3.0	2.0	3.0	3.0	2.0	0	0.5	0	1.0	7.0	12.0	4.0	5.5	12.0	27.0	31.0	29.0
福	島	0	0	1.0	0	0	—	0	0.5	0	0	0	0	1.0	3.5	2.0	13.0	20.0	20.0
千	山	10.0	11.0	10.0	10.0	10.0	6.0	21.0	23.0	19.0	20.0	21.0	17.5	14.0	12.0	10.0	6.5	5.5	8.2
葉	梨	—	—	—	2.0	1.5	1.0	—	—	—	0	0.5	0.5	—	—	—	3.0	3.8	3.0
神	奈	—	—	—	14.0	10.5	9.0	—	—	—	9.0	5.0	4.5	—	—	—	4.0	1.7	0.3
東	京	22.0	16.0	10.0	—	—	—	18.0	12.0	9.0	—	—	—	10.0	6.0	4.0	—	—	—
そ	他	40.0	33.0	37.0	32.0	25.0	35.0	13.0	12.0	10.0	11.0	9.0	8.5	22.0	18.0	18.0	6.5	4.5	7.7

(ロ)

		9						10						11					
		35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40	35	36	37	38	39	40
埼玉	栃木	41.0	40.0	17.0	9.0	6.0	3.0	26.0	25.0	10.0	8.5	10.0	13.0	1.0	1.0	2.0	2.0	5.0	4.0
茨城	栃木	16.0	25.0	40.0	40.7	38.0	27.0	23.0	30.0	32.0	18.5	14.5	7.1	0	1.0	1.0	0	0.5	0.5
		5.0	7.0	14.0	14.0	11.0	8.5	3.0	6.0	6.0	5.0	3.5	3.0	0	0	0	0	0	0
福	島	4.0	5.0	8.0	17.0	21.0	39.0	3.0	0.5	2.0	3.0	6.5	14.0	0	—	—	0	0	0
千	山	7.0	7.0	1.0	3.0	5.8	5.0	5.0	6.0	8.0	13.0	24.0	26.0	2.0	3.0	7.0	9.5	9.0	13.0
葉	梨	—	—	—	8.0	13.5	9.0	—	—	—	23.5	19.0	9.7	—	—	—	6.0	0.5	0.5
神	奈	—	—	—	1.3	0.5	0	—	—	—	1.0	1.0	0.2	—	—	—	0	0	0
東	京	9.0	6.0	1.0	—	—	—	7.0	1.5	2.0	—	—	—	0	0	0	—	—	—
そ	他	18.0	10.0	10.0	7.0	4.2	8.5	33.0	31.0	40.0	27.5	21.5	27.0	97.0	95.0	9.0	82.5	85.0	82.0

		12					
		35	36	37	38	39	40
埼玉	栃木	0	0	0	0	0	0.5
茨城	栃木	0	0	0	—	0	0
		—	—	0	—	0	0
福	島	—	—	—	—	0	—
千	山	0	0	1.0	1.0	1.0	1.5
葉	梨	—	—	—	—	0	—
神	奈	—	—	—	0	—	—
東	京	0	—	0	—	—	—
そ	他	100	100	99.0	99.0	99.0	98.0

1. 「キュウリ」は食われるが競争も激しい。

第1表は東京市場に出荷している主要産県の生産推移であるが、埼玉、東京、千葉、茨城の4都県に栃木、福島、山梨の新興産地が台頭し、激しい競争をみせている。昭和35年には埼玉が供給量の30%を占め、次いで東京が12%、千葉、茨城が続いており、栃木、福島、山梨からの供給量は無視できる程度であった。それが5年後の昭和40年をみると埼玉は年々減少し19%、茨城、千葉は減少ないし横ばい、東京は数字としてつかめない状態

にある。反面栃木、福島、山梨、神奈川の産地は着実に伸び、埼玉を除いてはほぼ互角の発展ぶりを示している。さらにそれを月別推移でみると明らかに産地は移動している。キュウリの出荷最盛期は7、8、9、10月に集中しており、この期間の競争が最も激しい。ところが本表にみられるとおり大産地である埼玉は8、9、10月の市場供給は急減し、茨城、千葉も減少しているが、栃木、福島は急増し、8、9月は両県で50%以上を占め、特に福島が着実な伸びをみせているが、埼玉などは4、5、6、7月に移っている。

2. 「須賀川きゅうり」のあらまし

「須賀川きゅうり」の代表的産地である西袋地区は東北本線須賀川駅から2kmの地にある。国道4号線の縦貫する交通立地に恵まれたため、特に商品経済への接触が多く、農業経営は水稲作+果樹(梨、リンゴ)を中心にした商品生産農家が多い。畑作へのそ菜導入は古かったが特にみるべき作物は少なかった。しかし昭和33年以降、果樹栽培を通して商品経済の浸透がきわめて強く、東京市場の卸売業者の強い働きかけは、輸送園芸の花形たるキュウリ、インゲン作などにみふきらせた。

第2表 西袋農協管内キュウリ栽培の推移

(1ケース10kg)

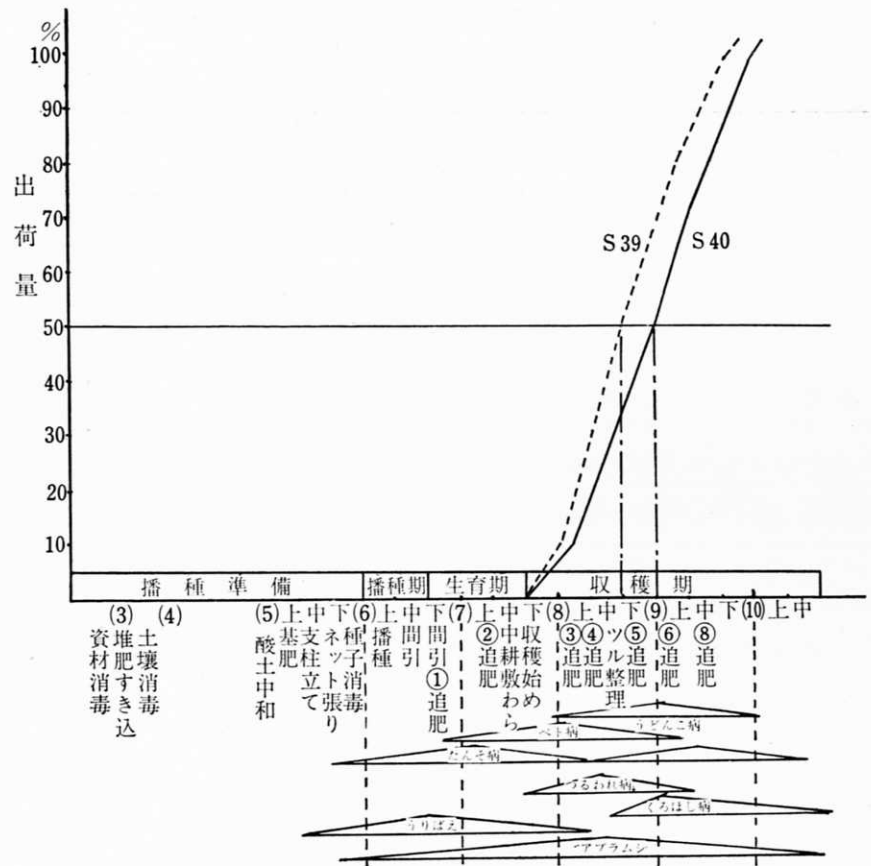
年 度	面 積	栽培人員	総出荷量	販 売 額 (平反)	備 考
34	10.00 ^{ha}	155 ^人	— ^{ケース}	—	芯 止 地 這
35	18.00	210	—	—	//
36	25.72	250	56,081	23,046,410 (2,180)	//
37	42.70	400	77,623	34,896,914 (1,810)	と き わ、竹支柱奨励
38	43.17	400	124,838	69,772,550 (2,890)	と き わ、のり綱導入
39	49.47	400	153,209	65,553,380 (3,090)	// 全面ネット
40	60.00	380	137,115	106,709,840 (2,950)	//
41	50.00	400	150,000	750,000,000 (3,000)	// (推定)

キュウリ作の経過については第2表のとおり昭和34年に初めて10ha栽培され、耕作者は155人で1戸当り面積もわずかに1aから1.5aと試作段階であった。特に36年頃までは技術体系も確立されていなかったため、市場性は低く、昭和34・35年の出荷量は皆無に近かった。しかし昭和36年に第1図の技術体系が確立し、それまでの自己流栽培技術は急速に改善され、良質多収生産に変わった。その結果面積、耕作者は増大し、地這キュウリから「ときわ」系の導入と竹支柱、ネット栽培の導入で市場の好評を博し、容易に市場開拓は成ったわけである。第3表は県産キュウリに「須賀川きゅうり」の占める割合を示したものであるが、昭和39・40年ではいかにその地位を高めたかがわかる。しかし第2表にもあるが、昭和36年から昭和37年の急増にもかかわらずその後の推移は緩慢である。それは西袋農協の指導が1戸当り最高20a以下に押え、

(1)良質多収を絶対条件とする。(2)計画栽培によって市場価格の低落による危険分散、(3)雇傭労賃の排除など、できるかぎりコスト節減を図り、所得向上を目指すという方針が徹底されていることが面積を押えている理由である。なお、(4)こゝ2～3年来の地力低下で良質生産に限界がある、(5)共撰、果樹作業の労力競合があり、人件費軽減を図るほどの問題も内在している。

3. 強力な集荷、出荷体制で市場対応

ところで、第1表でみたように8、9、10月の市場競争では明らかに新旧産地の交代がみられ、旧産地である埼玉は4、5、6月の早期出荷が増大している。第3表にみられるとおり8、9月の福島県産の50%以上を産する「須賀川きゅうり」が新興産地として先進産地をおびやかすに至った出荷体制をみてみよう。



第1図 須賀川キュウリの技術体系と出荷

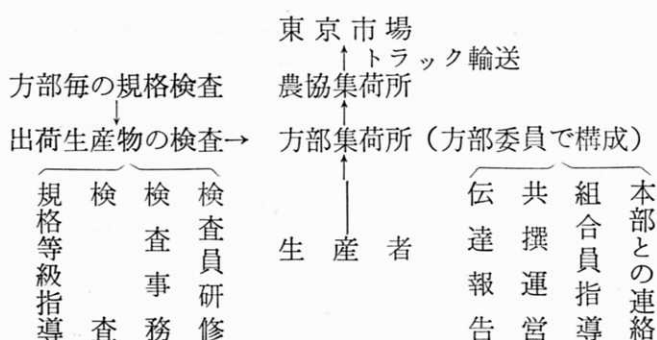
まず、西袋地区にキュウリが導入された動機については先に述べたが、さらに(1)晩出しそさい類が他作業との労力配分が少ないこと、(2)交通条件の好転で、晩出しキュウリは果実との共同出荷がとりやすいこと、(3)従来からの枝豆が地元商人によって売買され、その不利益の経験から共同販売の気運があったことなどが陰にある動機であった。その結果が前述の第2表の数字となったのであるが、この急増は次の理由もある。すなわち、(1)キュウリ作が比較的栽培技術が容易で初心者も体得しやすく、(2)産地化にあたった農協指導陣、農業改良普及員の技術指導の努力があったことなどである。しかし、大消費地を対象とするそ菜栽培は単に栽培面積を多くし、生産量を増大するだけでは産地形成はなりたらず、そこには強力な、また急速に市場対応のできる集荷、配荷とい

第3表 表東京市場における「須賀川きゅうり」の占める割合

昭和39年	8月				9月				10月
	上	中	下	計	上	中	下	計	上
東京市場全入荷量	4,304 ^t	5,521	5,552	15,377	5,693	4,839	3,016	13,548	
	7%	18	15	14	14	12	7	12	
須賀川「きゅうり」入荷量	297 ^t	1,007	839	2,143	777	603	215	1,595	
県産入荷量				3,437				3,207	
				62.5%				49.5%	

昭和40年	8月				9月				10月
	上	中	下	計	上	中	下	計	上
東京市場全入荷量	5,371 ^t	5,152	5,085	15,608	5,205	3,527	2,106	10,838	1,186
	7%	13	18	12.3	20	22	16	20.6	13
須賀川「きゅうり」入荷量	365 ^t	657	901	1,927	1,090	810	337	2,237	157
県産入荷量				3,333				4,434	
				58%				50.5%	

う出荷体制が確立されねばならない。現在、当地区の集荷組織は次のようである。



キュウリの市場商品価の高いのは第4表にあるSの基準で第5表等級別出荷量の内容でも単価はきわめて高い。また、品質でもA、Bに分け、形状、色沢、曲りなどによって分類される。このような出荷形態のもとでの労力は水稲作、果樹作との競合となり、規格検査がルーズになるという懸念もある。その対策として方部集荷所が生産者10名から1名の割で検査員を出し、検査、荷造りをして農協集荷所に集荷するのであるが、市場商品性を高めるという役割りをになう方部検査員の任務は重大である。出荷物への生産者の責任の所在は検査員が明らか

第4表 きゅうり規格について

形 量 区 分	選 別 基 準	1箱当本数	表示	調整	容器	量 目	荷 造 方 法
LL	140g～200g ^末	50～70 ^本	ダ ン ポ ー ル に 表 示 す る。	過 熱 を 除 く。 わ れ、 傷	ダ ン ポ ー ル	10kg (入目) 0.5kg	ダンボールに順序正しく詰める。平線4カ所止めとする。ただしゴムテープで封緘してもさしつかえない。
L	125g～140g	71～80					
M	110g～125g	81～90					
S	100g～110g	91～100					
SS	90g～100g	101～110					

品質区分：A. 品質、形状、色沢良好なもの

B. Aに次ぐもの（曲りの程度 S, SS 1cm～1.5cm
M以上 1.5cm～3cm）

第5表 須賀川キュウリ(西袋地区)の等級別出荷量

等 級	昭 和 39 年		昭 和 40 年		
	数 量	単 価	数 量	単 価	販 売
S	62,413	552	50,729	958	45.6%
M	12,377	449	14,489	771	10.0
L	7,947	350	10,245	589	5.6
LL	9,339	272	5,243	540	3.0
BS	26,419	401	29,544	765	21.1
M	15,535	344	8,432	602	5.0
L			6,602	522	3.2
LL			21	268	0.2
B	14,992	266	9,143	627	5.0
格外	?		2,567	435	1.0

にしており、規格通りの荷造りを生産者にまかせないため、農協集荷段階、市場段階でのクレームはない。こうして24カ所の集荷が終り、農協から東京に出発するのは午後6時である。その輸送体制は岩瀬地区青果物輸送協議会があり、(1)青果物輸送体制の確立、(2)運賃の決定、(3)出荷業務の協定などを司さとり、各農協代表者、須賀川市内運輸業者らがメンバーとなっている。業務の細目は(1)1週間分の各農協の出荷数量を把握し、(2)それによって出荷計画、配車計画をたてる。それから経済連出張所が市内と連絡をとり、仕向市場を決定し、幹事組合に指示し、幹事組合は各農協に連絡する。協議会が確保している車両は6t車以上のトラック30台で8～9月を盛期として東京間を1日平均5～8台が往復して翌朝未明の東京でセリにかかるわけである。

む す び

1. 産地間競争は市場価格の競争であり、技術革新の

競争である。こゝでは組織的集合体である農家群が集約作目であるキュウリ作導入によって産地形成をなし、さらに現実に市場優位を保つに至った市場対応の側面をみたものである。

2. 東京市場をめぐる競争は埼玉、茨城、栃木、福島、千葉、山梨、神奈川の諸県であるが、埼玉、千葉、神奈川は後退しており、福島、山梨が伸びている。特に福島の伸びは急で「産地は北上している」ことが明らかである。

3. 特にキュウリのような耐輸送性があり、土壌などの条件で良質多収に差がある作物は栽培技術のみで生産地の地作を確保することは困難である。また、栽培技術の習得しやすいのも影響して産地の移動は激しい、したがって新興産地の台頭が可能である。

4. 産地間競争はたえず市場の要求する大量、品質、規格などの競争でもある。それに対処する計画的な指導体制、出荷体制は重要な問題である。

5. 当地区の今後の問題点

(1) 出荷体制の強化、すなわち各農協が統一され、共同出荷で「須賀川きゅうり」を売り出したことは市場の信用を高めたが、さらに共同撰果、規格、包装、検査などの強化が必要である。

(2) 新興地帯でありながら、すでに土壌病害、いや地現象も生じている。今後研究せねばならないのは輪作体系の確立、田畑転換の方式などである。

(3) 当地区は果樹栽培が盛んであり、今後は一本化した共販体制を推進するため、さらに系統利用による安定価格の維持研究が必要である。